

アウクスブルク市のバリアフリー

伊藤 巧

テーマについて

私は自分の大学では経営学部には所属しているが、ゼミ内では、主にバリアフリーやユニバーサルデザイン（簡単に説明すれば、文化や老若男女、障害の有無に関わらず、誰もが同じように利用できる製品や施設などを指す言葉）といった福祉的な分野を専攻している。

ドイツは先進的な福祉国家として知られているので、福祉について学んでいる者としては、今回の青年使節団としての活動は、日本とはどのように違うのかを肌で感じる絶好の機会となった。アウクスブルクやベルリンでは多くの場所を視察する機会を得たので、各所のバリアフリーに対する取り組みについて取り上げていきたいと思う。

はじめに

現在の日本では、バリアフリー新法と呼ばれる法律が施行されている。この法律は高齢者や障害を持つ人が、移動の際に障壁となる階段や段差を限りなくゼロにすることを目的とした取り組みである。新法とあるように基本となった法律があり、ハートビル法（飲食店向け）と交通バリアフリー法がこれに該当する。これら2つを合体させた上で対象者や対象物を拡大した法律がこのバリアフリー新法である。

一方、ドイツにも「障害者平等法」というものがあり、この法律は、障害者という社会的立場の差別的な取り扱いを廃し、日常生活における障壁（段差や階段）を排除することによって、バリアフリーな空間や社会作りを目指そうという法律である。上記のバリアフリー新法は2006年に施行されているが、ドイツの「障害者平等法」は2002年より施行されている。

つまり、ドイツの方が日本よりも早く国を挙

げてのバリアフリー化に向けた取り組みを行っているのである。（ハートビル法は1994年に制定されているが、バリアフリーに対する意識の低さからあまり取り組みが行われていなかった。）

バリアフリーの実例

では、実際にアウクスブルクではどのようなバリアフリーに対する取り組みが行われているのかをいくつかの尼崎市の施設と比較しながら、検証していきたい。

（日本では多くの方が人力による車いすを使用しているが、海外では電動車いすの方が多く使われているが、今回は人力の車いすを使用する想定で比較している。）

新市立図書館

最初に、この図書館の入口には段差がないので車いすの利用者でも一人で入館できる。アウクスブルクの新市立図書館では一階に子ども用のスペースや講演会用のホールがあり、上階には学生や大人向けの書物が置かれているが、階段だけではなく、一階の左手奥にはエレベーターもあるので、上階へも何の不自由もなく行き来が可能である。太陽光を取り入れる仕組みを取り入れており、環境にも配慮している。

それに対して、尼崎市立中央図書館の例を挙げれば、外には障害者用の駐車場が用意されており、入口にスロープがあるが、とても長いので、高齢者の車いす移動には適していないと思われる。（付添人に押してもらわないと入れない。）別入口にエレベーターがあるが、職員を呼ばなければならないし、何よりも特別扱いされているという意識を与えてしまうので、ハード面はあまり良いとは言えない。ただ、中央図

書館も中に入れば対面朗読室があり、車いすの貸し出しも行っており、バリアフリーに対する配慮は行われているので、人力によるソフト面からカバーすれば問題ないと考えられる。



図書館入口



児童用スペース



エレベーター

駅に関するバリアフリー

アウクスブルク市内の駅はとても規模が大きく、トイレが有料で入口が狭いなど多少の問題はあるにせよ、ホームに上がるエレベーターも設置されており、ドイツ語や英語が読めなくても目的の場所に行けるようにピクトサインを用いた標識が駅の至るところに掲げられていたので、駅としての設備は充実していた。

駅だけでなく車両にも配慮がされていて、乗り口に車いすマークのボタンがある車両も見受けられた。これを押すことによって、ステップがホームにせり出し、乗り降りすることが可能となる。トラムに関しても、車高が低いことに加えて車内も広いので、乗り降りがしやすいように設計してあると思われる。（日本のノンステップバスと同じぐらいの高さに見えた。）

しかし、これが小さな駅になると話は別である。駐車場から駅までの距離も離れていて、エレベーターは設置されていないし、通路も長いスロープが一本存在するだけである。障害者や高齢者であれば、一人では登れないと思われる。



ホームステイ先の最寄駅の通路



車いすボタン付き車両

それに対して、尼崎の駅は非常によく整備されている。私の最寄駅である阪急塚口駅、阪急武庫之荘駅、JR 立花駅、JR 尼崎駅の全ての駅にスロープもエレベーターも完備されている。それに加えて、車いす使用者が乗り込む際には駅員がスロープを持って補助もしてくれるので、ソフトとハードの両面でしっかりとしたサービスが提供されていると思われる。

アウクスブルク大学

最後にアウクスブルク大学に関してのバリアフリーについて検証したい。

大学とは学びの場なので、学生が勉学に集中できる環境を整えることが大事だと思う。それと同様に、障害のある学生も勉学に集中できるようにバリアフリーの環境作りも大切である。

まずは日本の大学でも設置されているが、車いす使用者用の駐車場である。校舎に隣接されているので、ゲストスピーカーとして授業に出る際も長距離を移動することなく速やかに校舎へと移動できる。それに加えて、歩道も整備されている。



大学の駐車場

また、校舎に入る通路にもスロープが設置されている箇所が多く見受けられた。（少ない段差であればスロープのない場所もある。）校舎内にはエレベーターも設置されており、車いすや身体障害者でも過ごしやすい空間作りに努めているように感じられた。

参考文献

最新ドイツ事情を知るための50章
明石書店 浜本隆志、柳原初樹著



歩道からのスロープ



校舎側のスロープ

他の車いす使用者へのバリアフリー例

プッペンキステ博物館の入り口



入場ゲート



エレベーター

結 論

ここまで、バリアフリーが実施されている例を挙げながら、どのような取り組みが行われているのかを説明してきた。だが、いくら施設内の段差や差別的な意識が無くなっても本当の意味でのバリアフリーは完成しない。

何故なら、誰もが人の助けなしには生活を営めないからである。困っている人がいれば手助けをしたり、声をかけることが最も重要なことではないだろうか。

私は短期間ではあるがアウクスブルクでの滞在でそこに住む人々の親切さを実感した。

「誰かの為に何かをしてあげよう」というその意識の高さによってドイツは「福祉国家」として世界中に認識されているのだと私は考えている。私も福祉を学ぶ者として、この意識を持って日々行動し、社会の意識向上に取り組んでいきたいと考えている。